

ローブ・ア・ラ・フランセーズを観る

齋藤益美

生活科学専攻

(2017年9月25日受理)

Rose-Robe a la Francaise

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SAITO Masumi

(Received September 25, 2017)

要 旨

インフォーマルで着用されていたゆったりしたドレスを、ポンパドゥール侯爵夫人はフォーマルな場所でも着用できる正式な女性用宮廷服として着こなした。そのローブ・ア・ラ・フランセーズを18世紀ロココの絵画からデザインと装飾について考察する。また、今の学生の衣服に観られるロココとの共通の装飾について観る。

キーワード：ローブ・ア・ラ・フランセーズ ヴァトープリーツ ロココ 装飾

1. はじめに

被服の変遷を見的过程中で、誰もが目を引く優美で女性らしいロココ時代の女性服は、多くの宮廷画家らが美しいその姿を残している。繊細な曲線と豪華な刺繍やレース、フリルやリボンなどの装飾に溢れ華やかさを際立たせている。それらは女性の美しさを存分に引き出し、新しいモードの基調を形成したと言える。

近年、若者の服を中心に刺繍、レース、フリルやリボンはトレンドのキーワードとなっている。さらにギャザーやフレアー、パスマントリーも同様である。それらの女性らしい装飾がふんだんに施された18世紀の女性宮

廷服の典型的な衣装ともいえるローブ・ア・ラ・フランセーズについて考察を試みる。

2. ローブ・ア・ラ・フランセーズ

18世紀のフランスはロココと呼ばれる宮廷文化の時代である。ロココの典型的な女性服であるローブ・ア・ラ・フランセーズはピース・DESTOMA (piece destoma), ローブ (robe), ペチコート (petticoat) からなっており、着装時にはコルセット (corset) とパニエ (panier) を使用する。

この頃のコルセットは丈が長く前中心はさらに長く尖った形のもので、ウエストを細く整えバストを下から締め付け支えることで腹



図1 ローブ・ア・ラ・フランセーズ

部は平たく乳房がこぼれ落ちるようなスタイルを作り出していた。コルセットで作られた細いウエストにボリュームのあるパニエを着装することでヒップは大きく膨らみ、細いウエストはさらに強調された。

コルセットとパニエで身体を形作った上からペチコート（スカート）とローブ（ガウン）を着装し、ローブの前あき部分のコルセットを覆うピエス・デストマを着装する。



図2 アンガジャント

ペチコートは下半身を覆うスカートのような衣服で、ローブの前開き部分から見えるものがそれである（図1）。ローブと共布で作られているものが多く、のぞき見える部分には豪華な装飾が施されており、ウ

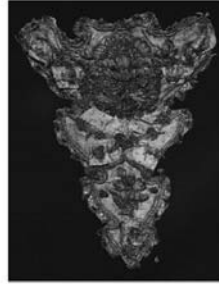


図3 ピエス・デストマ

エスト部分はたっぷりのギャザーで足首まで届く長さがあった。

ローブは袖が付いたワンピース形式の衣服である（図1）。この頃

のローブは生地をふんだんに使った

ゆったりした前あきのガウンであり、大きく膨らんだペチコートの上に着用していた。背中には肩から裾まで流れる大きなブリーツがたたまれ、袖口は繊細で豪華なレースやドロンワークで作られたアンガジャント（engagantes）で飾られていた（図2）。

ピエス・デストマは装いをより華やかに豪華に飾る装飾性の高い胸当てのことである（図3）。胸のコルセット部分を覆うV字型のもので刺繍、宝石、レース、リボンなどが贅沢に使われ、ドレス着装のポイントとなっていた。

贅沢は装飾だけではない。絵画にも美しい光沢のドレスの生地が表現されている。シルクの紋織物である。フランスにおいては絹の町リヨンの製絹織物が使用されていると考えられる。ローブ・ア・ラ・フランセーズのローブとペチコートの本体部分だけの生地使用量は、当時の布幅が50 cm 前後とした場合15 m 程必要ではないかと推測される。更にフリルやリボンを共布で作る場合20 m に及ぶことも考えられる。1730～1760年のリヨンでのシルク産業従事者が3万人を超えることも納得できる。

また、ジャガード織り機が発明された1804年以前であることから、生地製作の困難さが伺える。

3. 絵画に観るローブ・ア・ラ・フランセーズ

18世紀のフランスは、世界的に流行の中心地であり、その発信源は上流階級の女性たちであった。ルイ15世の公妾であるポンパドゥール侯爵夫人 (Madame de Pompadour 1721~1764年) やルイ16世王妃マリー・アントワネット (Marie Antoinette 1755~1793年) がよく知られており、服装だけではなく髪型やアクセサリさらには生活や趣味などにおいてもその流行の発信源となっていた。

もともと部屋着や妊婦用の衣服といったインフォーマルで着用されていたドレスを、ポンパドゥール侯爵夫人がフォーマルな衣装として着こなした。以来ローブ・ア・ラ・フランセーズは正式な宮廷服となっていた。ローブ・ア・ラ・フランセーズは先に挙げた多くの装飾が施され、背部には肩から裾まで一直線に伸びるプリーツがたたまれているのが特徴である。このプリーツはヴァトープリーツと言われ、アントワーヌ・ヴァトー (Jean Antoine Watteau 1684-1721年) の絵画に美しく描かれていることからその名がつけ

た。

ヴァトーが1720年に描いたといわれる「ジェルサンの看板」にはローブの背中にヴァトープリーツのあるドレスを着た女性の後ろ姿が描かれている (図4)。肩でたたまれたプリーツが背中をまっすぐに流れ、途中で自然にプリーツが消えていくことでバックスタイルは体の線が現れず、平らな壁のようである。ゆったりした部屋着として、また妊婦の体形の変化にも対応する衣服として着用できるシルエットであることは見て取れる。この絵画からドレスの前面を見ることはできないが、おそらく前身頃の肩からもプリーツがたたまれ、ふんわりと広がったシルエットで、前開きもゆったり閉じられたローブ・ヴォラント (robe volante) ではないかと推察する。

ジャン＝フランソワ・ド・トロワ (Jean-Francois de Troy 1679-1752年) が1731年に描いた「愛の告白」は、右に立つ後ろ姿の女性のドレスに美しいヴァトープリーツが描かれている (図5)。こちらでもドレスの前面を見ることはできないが、ウエストから裾に向かうローブのラインがやわらかな曲線を描いていることから、前身頃にもプリーツがたたまれているものと推察される。

この美しい後ろ身頃のヴァトープリーツをそのままに、前身頃を身体にぴったりフィット



図4 ジェルサンの看板 (一部)



図5 愛の告白



図6 ポンパドール夫人の肖像
(モーリス・カンタン・ド・ラ・トゥール)

トさせることで、インフォーマルなドレスを宮廷服として広めたのがポンパドール侯爵夫人であった(図6)。美しいシルクの生地で作られたローブとベチコートからは高級感が漂っている。ローブは裾に向かってゆったりとしており、ベチコートもたっぷりの布を使って膨らんでいるが、ローブ前身頃の肩からウエストにかけてはぴったりと身体にフィットしているのがわかる。袖口は幾重にも繊細なレースとドレスの共布でできたフリルが重なったアンガジャントで飾られ、胸のピース・DESTOMAにはサテンの大きなリボンがいくつも並べられている。大きく開いたデコルテの周りにはレースがついている。優しい色合いで落ち着いた雰囲気のローブ・アラ・フランセーズである。

注目したいのはドレスだけではない。ポンパドール夫人の周りには、美術品や骨董品、

地球儀や楽器、多くの重々しい書籍が描かれている。手には楽譜を持っているように見える。高い教養と芸術的な才能に恵まれた女性であったと言われているが、この絵からも十分その才色兼備ぶりが伺える。宮廷での晩餐会やサロンの華であり、政治や文化、芸術をリードする能力を兼ね備えた女性であった。ロココはまさに女性の時代であった。

4. おわりに

前に述べたように、優雅で女性的なあらゆる装飾を過剰なほどに使用したローブ・アラ・フランセーズであるが、ここ数年、学生のファッションアイテムにそれらの華やかな装飾が頻繁にみられるようになった。もちろん手工芸的な繊細さや高級感は劣るがとても女性らしい装飾が増えている。(図7~図9)

袖や身頃に大きな刺繍が施されたジャケット、ブラウス、パンツやスカートにも多くみられる(図7)。

ボリュームのある袖口や、レース、リボンポイントを袖のブラウスやワンピースが多くみられる(図8)。

首元、肩、背中、胸、ウエストに大きなリボンを付けたアイテムも多くみられる(図9)。

これらとともに大きく膨らんだ袖と袖口、



図7 生地に施された刺繍



図8 レース，リボンをあしらった袖口



図9 首周りの大きなリボン

幅の広いリボンやフリルが付けられた身頃、胸の位置で紐で縛り上げられたカットソー、ビジュアの施されたシャツやブラウス、カッ

トワークやレース素材など18世紀ロココの装飾は今の学生たちの衣服を女性らしく華やかに飾っている。この女性らしい豪華な装飾とデザインはここ数年特に大きくなり目立っている。

18世紀の女性たちのように、華やかで軽快で陽気な女性の時代なのだろうか。ポンパドール侯爵夫人やマリー・アントワネットのように、文化や政治のリーダーとなるような知的で美しい女性の時代なのかもしれない。華やかな美しさの中に、社会を動かしていく知性と行動力を持つ彼女たちの生き方を学生たちはどのように観るのだろうか。これからの服飾デザイン文化論の授業を通して、一緒に考えていきたい。

参考文献

- 1) 文化学園大学服装史学研究室「ファッション史 改訂版—西洋服装史概説—」 2011
- 2) 深井晃子「世界服飾史」1998
- 3) 野口榮子「絵画にみるヴァトープリーツ」大阪芸術大学紀要 25, 2002
- 4) 高階秀爾「歴史の中の女たち—名画に秘められたその生涯」1978
- 5) 森早智子「ローブ・アラ・フランセーズ—18世紀 宮廷衣装の再現—」2013 学士論文
- 6) 神戸ファッション美術館「DRESS COLLECTION」2016

